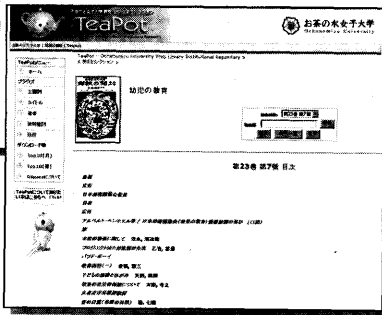


## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（1）

# 『幼児の教育』ネット公開と 幼児教育史研究の可能性

湯川 嘉津美



お茶の水女子大学附属図書館のWEB サイト内「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にて、バックナンバーをインターネット公開中。  
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

### ▼はじめに

『幼児の教育』誌がネット公開された。二〇〇八年八月現在、『復刻幼児の教育』の全文が公開されており、一九〇一（明治三十四）年の創刊（当時は『婦人と子ども』）から一九五三（昭和二十八）年までの掲載記事がパソコン上で読めるようになった。なお一九五四年以降についても順次公開される予定であり、幼児教育史研究者にとって、それは望外の喜びである。

『幼児の教育』と並ぶ幼児教育の専門誌として『京阪神聯合保育会雑誌』（一九二八年『関西聯合保育会雑誌』と名称変更）があるが、一八九八（明治三十一）年から一九二七（昭和二）年までしか復刻されておらず、戦後まで続く同誌の記事を通覧することは難しい。

そうした中で、『幼児の教育』は百年以上の歴史を持ち、しかも創刊から今日に至るまでのすべての記事を通読することのできる唯一の幼児教育雑誌であり、こ

れまでの研究でも重要な資料として用いられてきた。

筆者自身、大正・昭和初期の保育界の動向や倉橋惣三の保育論を検討するための資料として『幼児の教育』を用いており、『幼児の教育』なしに、近代日本の幼児教育史研究は成り立たないといっても過言ではない。

今回のネット公開では、『幼児の教育』が手軽に読めるようになっただけでなく、検索機能の活用により、必要な情報を瞬時に漏れなく利用することが可能となった。本誌第一〇七巻第九号（二〇〇八年）の「特集『幼児の教育』のネット公開をめぐる」では、そうしたネット公開のプラス面が示されるとともに、資料の簡便な入手による研究上のマイナスの影響が懸念されている。

本稿では、そうしたマイナス面があることを充分に認識しつつ、『幼児の教育』のネット公開が幼児教育史研究にどのような可能性を開くかという視点から、その研究上の意義について考えてみたい。

### ▼人物・思想研究の進展に向けて

『幼児の教育』には、日本の保育界をリードした（東京）女子高等師範学校附属幼稚園関係者の論説が数多く掲載されている。人物名で検索すると、中村五六（二三件）、東基吉（三一件）、和田實（八八件）、倉橋惣三（六一六件）となる。倉橋の場合、『倉橋』「くらはし」「SK生」「紹介子」などでも記事を掲載しているので、これらを合わせると記事の総数は七六四件となる。筆者はこれまで中村五六、倉橋惣三について論文をまとめているが、今回改めて『幼児の教育』の記事を検索していて、見落としていた論考がいくつかあることに気づいた。検索によって人物に関する情報が漏れなく入手できることは、人物・思想研究にとって非常に重要であり、それは今後の研究の進展に大きな力となるだろう。

従来、倉橋については比較的研究蓄積があるが、倉

橋の著作をその初期のものから時代状況とかかわらせながら歴史的に跡付ける作業は遅れている。加えて、『倉橋惣三選集』（全五巻・フレーベル館）に収録された論考を中心に研究を進める傾向が強く、選集に未収録の戦時下の論考については、ほとんど検討されていない。しかし、倉橋は戦時下においても「国民幼稚園」論を盛んに展開し、時局の影響を受けつつも、幼稚園教育の義務制と幼保一元化、保姆の資格と待遇の向上といった幼児教育制度改革の必要性を主張していた。それは戦後の制度改革要求にもつながるものであり、「国民幼稚園」論の検討を行わずに、戦後の倉橋の主張や彼が果たした役割を理解することは難しい。「幼児の教育」を通読することによって、戦前から戦後に至る倉橋の保育論の歴史的検討が進むならば、倉橋の評価も自ずと定まってくるのではなからうか。また、中村、東、和田といった人物の保育論も併せて検討することによって、近代日本の保育思想がどの

ように形成されたのか、その全体像を描出することも可能となろう。今後の研究の進展に期待したい。

### ▼問題史のアプローチへの期待

#### — 幼稚園と小学校の連絡問題を事例として —

検索機能が一番威力を発揮するのは、問題史研究においてである。今日の幼児教育をめぐっては、幼保の一元化、五歳児保育の義務化・無償化といった制度的問題から、幼稚園教育の内容・方法、幼小の連携、子育て支援、保育者の養成と現職研修のあり方など、さまざまな問題・課題が提示されている。しかし、歴史を振り返れば、それらは戦前・戦後を通じて繰り返し提起され、議論されてきた問題であり、今日なお課題として残されているものである。したがって、その歴史的検討は幼児教育史の課題であると同時に、今日の幼児教育を考える上でも必要なことである。

ここではその一つの試みとして、「幼稚園と小学校

の連絡」を事例に、『幼児の教育』の記事を追ってみたい。「幼稚園」と「小学校」「国民学校」をキーワードに検索を行ったところ、次のような記事が見いだされた。

①一九〇七～一九一一（明治四十～四十四）年

「小学校より見たる幼稚園」（加藤末吉）

「幼稚園の特技と小学校の手工」（藤五代策）

「小学校と幼稚園との關係」（大元茂一郎）

「小学校より見たる幼稚園」（藤井利譽）

「幼稚園より小学校へ入學したる兒童の實際成績

如何」（藤田東洋）

「幼稚園の保育を終りたるものと家庭より直ちに

入學したる者と小学校に於ける成績の比較」

（笹野豊美）

「幼稚園と小学校との課業上の聯絡」

（佐々木吉三郎）

②一九一六～一九二三（大正五～十二）年

「幼稚園から小学校への聯絡一〇六」

（小山ひで、岡政、小向喜美、橋本よしち、三宅

トモ、望月くに）

「小学校から幼稚園への希望一〇三」

（前田捨松、河野清丸、稻垣知剛）

「小学校に現はれた幼稚園の成績」（市島貞三）

「幼稚園と小学校との聯絡問題」（藤井利譽）

「幼稚園と小学校との聯絡問題（一・二）」

（アリス・テンプル女史、艶子訳）

「幼稚園から小学校へ—幼稚園と小学校幼年級の

眞の聯絡—」（倉橋惣三）

「小学校から幼稚園への希望」（堀七藏）

「海外記事 幼稚園・小学校の初等年級のプロ

ゼエクト」

③一九三三～一九四三（昭和八～十六）年

「小学校より幼稚園に望む」(櫻井美、小山文太郎)

「小学校と幼稚園との連絡問題」(久保田龜蔵)

「幼稚園と尋常小学校との連絡に関する資料調査」  
(東京市保育會)

「幼稚園と小学校の聯絡」(倉橋惣三)

「国民學校の實施を前にして幼稚園に望む」

「国民幼稚園の名に於て」(三)

「国民學校との連繼性」(倉橋惣三)

「国民幼稚園の名に於て」(四・五)

「国民學校への正しき連絡」(倉橋惣三)

④一九五二〜五三(昭和二十七〜二十八)年

「特集 幼稚園と小学校との連絡」(編集部)

「幼稚園と小学校」(中川武夫)

便宜上、四つに時期を分けてみたが、第一期は、幼

稚園教育の効果に対する疑問から幼稚園批判が巻き起こっていた時期であり、幼稚園修了者の小学校での成績や幼稚園の手法と小学校の手工の連絡の必要性が論じられ、また、欧米の媒介學校をヒントに、幼稚園から小学校への円滑な移行を図るべきといった議論が展開されている。

そして、第二期においては、幼稚園の普及を背景として、幼稚園から小学校への連絡が解決すべき問題として取り上げられ、幼稚園保姆・小学校教員双方から具体的な方策が論じられている。アメリカにおける幼小連携の試みや幼稚園と小学校の学習をつなぐプロジェクトなども詳しく紹介されており、それは時代を超えて今日の幼小連携を考える上でも重要な示唆を与えてくれる。

第三期では、戦時体制へ向かう流れの中で、小学校(国民學校)と連携して皇国民鍊成を担う幼稚園教育のあり方が、国民教育の一貫性といった視点から論じ

られ、第四期では、戦後改革によって学校系統中に位置付けられた幼稚園と小学校との連絡問題が「緊急事項」として議論されている。

今回は試みに検索をし、記事を概観したにすぎないが、ていねいに検索すれば、もつと多くの関係記事を見いだすことが可能だろうし、内容を吟味して論点整理をきちんと行えば、今日につながる幼児教育問題の本質をつかむこともできるだろう。もちろん、『幼児の教育』の記事から見える世界には限界があり、その検討のみで結論を導くことには無理があるが、検索機能の活用により、時代を超えた問題の把握や全体の俯瞰が容易に行い得るようになったことの意味は大きく、それは問題史研究の今後の進展に寄与するものだろう。

### ▼おわりに

これまで『幼児の教育』のネット公開によって、幼

児教育史研究にどのような可能性が開けるかという視点から考えを巡らせてきたが、最近、初等教育史の側から幼児教育にアプローチする研究も増えており、先にもみた「幼稚園と小学校との連絡」については、初等教育史研究者も大きな関心を寄せている。そうした中で、『幼児の教育』のネット公開は、今後、初等教育史研究にとつても意味のあるものとなるだろう。今後は『幼児の教育』を介した幼児教育史と初等教育史の研究交流を期待したい。

最後に、技術的なことで恐縮だが、検索を新字で行えるようにしていただければ、と思う。現在は「幼児」「教育」「小学校」「フレールベル會」などと旧字で入力しなければ検索できないが、これを知らずに新字で入力すると、折角の検索機能を活かすことができない。また、戦後幼児教育史研究にとつて、五四年以降の『幼児の教育』の公開は重要である。鶴首して待ちたい。(上智大学 教授 日本教育史・幼児教育学)